

平成 29 年度
 NGO 海外援助活動助成事業
 完了報告レポート
 一般財団法人 ゆうちょ財団
 国際ボランティア支援事業部

はじめに

当財団の NGO 海外援助活動助成事業につきまして、平素からご理解・ご支援を賜り有難うございます。

平成 29 年度の助成につきましては、平成 29 年 2 月に助成先 11 団体を決定し、1 年間の活動実施を経て、このたびすべての団体から完了報告書を受領しました。各団体の完了報告書から、各団体の活動等の概要をとりまとめましたので、ご高覧いただけますと幸いに存じます。

なお、当財団といたしましては、当初の申請どおり活動が適正に実施されていることを会計面も含め確認いたしましたので、下記の金額を各団体にお支払いいたしました。

各団体の熱心な活動に敬意を表するとともに、今後のますますの事業発展をお祈りいたします。

平成 30 年 8 月

一般財団法人 ゆうちよ財団 理事長
朝日 讓治

団体名	金額（円）	団体名	金額（円）
認定特定非営利活動法人 アイキャン	713, 143	特定非営利活動法人 シャプラニール= 市民による海外協力の会	987, 493
公益社団法人 アジア協会アジア友の会	1, 000, 000	スリヤールワ スリランカ	876, 900
特定非営利活動法人 アジアの子どもたちの 就学を支援する会	800, 000	特定非営利活動法人 日本国際ボランティア センター	800, 000
特定非営利活動法人 国際開発フロンティア機構	855, 926	認定特定非営利活動法人 日本ハビタット協会	985, 072
特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか	999, 438	認定特定非営利活動法人 リボーン・京都	766, 833
認定特定非営利活動法人 国境なき子どもたち	888, 591		

団 体 名：認定特定非営利活動法人 アイキャン

助成活動名：フィリピン初の路上の若者の協同組合カリエによるカフェ運営プロジェクト

活 動 地 域：フィリピン共和国

団 体 本 部：〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階

HP アドレス：http://www.ican.or.jp

設 立：1994 年 4 月 1 日

都市化の進むフィリピンでは、路上で生活をする子どもたちが 25 万人以上いると言われています。家庭内暴力や育児放棄、経済的な問題で路上に押し出された子どもたちは、差別や偏見、空腹や病気に苦しみ、事故や犯罪等の危険にさらされてきました。さらに、トラウマや人間不信に陥ったり、辛いことや空腹感を忘れるために薬物やシンナーに手を染めたりすることもあり、多くの子どもたちは基礎的な教育を受けることができませんでした。

当団体では、2008 年以降から路上で生活をしている子どもたちへカウンセリングや基礎教育等を実施しています。現在も年に約 200 名の子どもたちへ実施しています。

また、かつて路上で生活していた 10 代後半の子どもたちの雇用を創出するために、マニラ首都圏の大学内にカフェをオープンしました。今年度は、調理や接客、マーケティング等カフェを運営していく上で必要な研修を実施しました。彼らは研修を通して、接客時に目を見て笑顔で対応したり、顧客の名前を覚えたりする等サービスの向上を目指しています。今後は、お客様から要望があったデザートを中心に、新しいメニューを増やしていく予定です。

カフェで働くメンバーは、現在も路上にいる子どもたちが路上での生活から抜け出せるよう「路上教育」を 3 回実施し、メンバー延べ 30 名が参加しました。自分たちの経験を踏まえて、薬物の危険性や人間関係、教育の大切さを子どもたちが理解しやすいように工夫して伝えました。この研修を受けて、9 名の子どもたちが学習する意欲を取り戻し、復学しました。その他に、路上新聞を年 3 回 500 部発行して、路上で生活をする子どもたちを生んでしまう社会問題や路上での生活等を伝えています。

路上での生活について話し合う子どもたち



カフェで働く若者



団 体 名：公益社団法人 アジア協会アジア友の会
助成活動名：バイオガスプラントの建設並びに設置地域の環境保全教育、生活改善指導
活 動 地 域：ネパール連邦民主共和国
団 体 本 部：〒550-0002 大阪府大阪市西区江戸堀 1-2-14 肥後橋官報ビル 5 階
HP アドレス：http://www.jafs.or.jp
設 立：1979 年 10 月 10 日（1988 年 4 月 社団法人アジア協会アジア友の会設立／
2012 年 4 月公益社団法人アジア協会アジア友の会 設立）

当団体は 2002 年より、ノールパラシイ郡ピトゥリ村において、給食による栄養改善事業を実施するとともに、バイオガスプラントの設置事業を開始しました。村人のほとんどが農業で暮らしを立て、定職に就いている人はわずか 5%に満たない状況の中で、村人にとって作物と生活の両面において役立つバイオガスプラントの設置は、大変関心の高い事業です。設置によって、薪の使用量を 1 家族 1 日に 10～20 kg節約することができ、森林破壊が急速に進んでいる森を守ることができます。また、生活環境においても、薪の使用量とともに煙が減ることによって、家を清潔に保つことができ、目、呼吸器、心臓等の疾患の予防にもつながります。特に、女性の健康状態を改善し、仕事の負担を減らす効果があり、村人の生活を大きく改善するものです。ネパール政府が設置費用の一部を補助していますが、貧しい住民に設置は不可能なため、当団体が支援をしています。

今年度は、バゲスワリ村に 10 基、トゥクチャ村に 7 基、ボテシパ村に 7 基のバイオガスプラントを設置しました。設置した家庭へはバイオガスプラントの仕組みやメンテナンスの注意点を伝え、長く使用していけるように研修を実施しました。また、既設置世帯に対してもフォローアップトレーニングを実施し、問題等の共有及び解決につなげました。

また、バイオガスプラントを設置した地域の小学校 9 校延べ 85 名の生徒及び教師 32 名に対し、児童環境セミナーを実施しました。参加者はエネルギーや地球温暖化、清掃活動等について学び、より良い環境づくりを目指しています。

ボテシパ村のバイオガスプラント



児童環境セミナーを受ける生徒と教師



団 体 名：特定非営利活動法人 アジアの子どもたちの就学を支援する会
助成活動名：最貧困家庭の母親達による、子どもの教育費用を得る為の縫製活動
「Mother to Mother」の強化事業
活 動 地 域：カンボジア王国
団 体 本 部：〒197-0825 東京都あきる野市雨間 429 多摩川幼稚園内
HP アドレス：http://www.tamagawa-kids.jp/asap/
設 立：2006年10月19日

カンボジアの農村部では、都市部に比べると貧しく、現金収入がほとんどない家庭が少なくありません。子どもは小学校に入学しても、貧困により途中で辞めることもあります。しかし、貧困の連鎖から抜け出すためには子どもの教育が重要と考え、お金があれば子どもに教育を受けさせたいと願う貧困層の親は多くいます。

当団体は、小学校校舎を寄贈後、2009年より最貧困家庭の母親が子どもの教育費用を自分で稼ぐことができる様、「Mother to Mother」の活動を開始しました。これは、裁縫が苦手な日本の母親に代わって、カンボジアの貧困家庭の母親が日本の幼稚園や小学校で使う布製品を手縫いで作り、日本国内の幼稚園や小学校等のイベントで販売する活動です。

今年度は、日本の46施設で作品を販売し、約340万円の売上げとなりました。

また、カンボジア国内にあるお土産店5店舗でも販売を開始し、1カ月当たり合計200ドルの売り上げとなりました。現在働いている23名のカンボジアの母親へ、年間1名当たり平均194ドルの報酬を支払うことができました。収入を得た母親は、進学する子どもに自転車や教材を購入したり、大学へ通う子どもへ仕送りをしたりできるようになりました。

この活動を通して、母親たちは働くことによって充実感を味わうことができ、自分に自信と誇りを持つようになりました。

その他に、5校の小学校の新1年生に対して通学リュック200枚を無料で配布しました。

縫い物作業をするお母さんたち



手縫いのリュックを背負う子どもたち



団 体 名：特定非営利活動法人 国際開発フロンティア機構

助成活動名：農村女性のモリンガ栽培普及と加工利用並びに伝統食ロンガニーサ作りの
ソーシャルビジネス化による収入向上と食・栄養改善

活 動 地 域：フィリピン共和国

団 体 本 部：〒160-0023 東京都新宿区西新宿 3-6-5-1008

HP アドレス：http://idfo.web.fc2.com

設 立：1981年10月18日

アルバイ州は、マニラ経済圏から離れていることから住民の多くは雇用機会や収入源に恵まれず、フィリピンの中でも最貧困地域とされています。

当団体は、貧困農村の女性たちの収入向上と村人たちの栄養改善のため、豊富な栄養素を持ち合わせている植物のモリンガの栽培普及と加工食品への利用、盛んな養豚飼育を基に、フィリピンの伝統豚肉加工食品であるロンガニーサ（ソーセージ）作りを始めました。

今年度は、モリンガの栽培や販売の指導、家庭での調理方法、ロンガニーサの作り方等について地域住民へ研修を実施しました。研修には延べ122名の住民が参加し、両事業への関心が高いことが分かりました。

モリンガは少しずつ収穫量が増え、1束10ペソ～15ペソで販売をすることができましたが、2018年1月に起きたマヨン山の噴火による降灰で、収穫量は減少しました。植え替えや手入れを行った結果、徐々に収穫ができるようになりました。また、加工食品として蒸し饅頭の販売、パン屋や飲食店への提供等を検討しています。

ロンガニーサ作りでは、村人は町まで行かなければロンガニーサを買うことができないため、町から離れた農村から販売の希望が多くあり、研修で作ったロンガニーサの販売を試みたところ、1本当たり2ペソの利益を上げることができました。このことが参加者のロンガニーサ作りへの関心を高め、地域での普及と市場の開拓へ期待が高まりました。

収穫したモリンガを集荷する女性たち



ロンガニーサ作りをする女性たち



団 体 名：特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか
 助成活動名：村の女性の自立支援とともに村人・子どもの栄養改善
 活 動 地 域：ネパール連邦共和国
 団 体 本 部：〒560-0021 大阪府豊中市本町 3-3-3
 HP アドレス：<http://tifa-toyonaka.org/>
 設 立：1985年11月1日

ネパールではヒンズー教の影響で男尊女卑の風習や、カースト制度が残っています。近年の急速な貨幣経済への変化の中で、貨幣を得る手段のない女性は家庭内でも地位が低くなっています。

当団体は1994年からジャナクプール県シンズリ郡において、女性・子どもへの識字教育、縫製や手芸等の職業訓練、孤児のための寄宿舎の運営、住民のための診療所の運営等を、2012年からは、女性が収入を得るための縫製技術指導やパッチワークキルトの技術指導を実施しています。現在では、技術指導を受けた生徒の中で、縫製・キルト工芸等で洋服店を開店した女性、収入を得られるようになった女性は約50名にも上ります。

昨年度より新たに開始した、製菓・製パン事業では、バザールに店を出し、現地で取れるひよこ豆や穀物等を材料としたパンとドーナツを販売し、8か月で53,300ルピーを売り上げることができました。ここで技術を身につけて、別の場所で店を開く予定の女性もいます。

貧しい子どもたちが通う村の小学校では、井戸とトイレを整備し、手洗いや歯磨きの指導を実施しました。それにより、子どもたちの衛生観念を育てることができました。

また、今までの給食では白米に塩をかける程度で、たんぱく質が不足していたことから、ゆで卵・牛乳・豆粉入りのパン等の給食を提供しました。栄養改善により、子どもたちの顔色も良くなりました。

パンとドーナツを販売するお店



村の小学校に通う子どもたち



団 体 名：認定特定非営利活動法人 国境なき子どもたち
 助成活動名：スラム地域における教育支援・子ども保護事業
 活 動 地 域：フィリピン共和国
 団 体 本 部：〒161-0033 東京都新宿区下落合 4-3-22
 HP アドレス：http://knk.or.jp
 設 立：1997年9月10日

スラム地域であるバゴンシーランは貧困家庭が多く存在し、犯罪率も非常に高い地域とされています。また、パヤタスは「スモーキーマウンテン」としても知られるゴミ山地区となっていて、未成年者もゴミ山で働き、その収入で生計を立てている家庭が少なくありません。当団体は、この2ヶ所の地区においてチルドレンセンターを運営し、学校に通っていない青少年へ教育の機会を提供しています。

今年度は、パヤタスで1ヶ所、バゴンシーランで3ヶ所にて政府公認システムである、非公式教育を292名の青少年へ実施しました。授業は初等教育レベルと中等教育レベルの2段階で実施し、働きながら通えるよう日曜日に授業を実施したり、自宅での課題を与えたりする等、それぞれの経済状況や学習能力に合わせ、通いやすい環境を整えました。また、欠席が続く学習者へは教員が家庭訪問をし、必要に応じて家族とも相談する等継続して授業に参加できるよう働きかけました。

このような教育を提供することによって、学習へのモチベーションを向上させ、公立学校へ復学する青少年もいました。

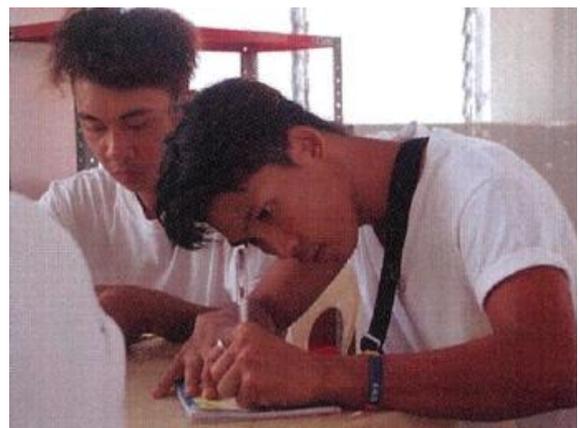
本年度2回実施された学業修了試験では、1回目の2017年11月に実施された試験では受験者47名の内、15名が合格し、2回目の2018年3月に実施された試験では53名が受験し、現在結果を待っているところです。

また、地域の保護者を対象に、主に「子どもの権利」について啓発活動を実施し、延べ101名の保護者が参加しました。この活動によって、人身売買や麻薬による未成年の被害について保護者の意識が向上し、地域内の虐待等の予防へつながりました。

啓発活動に参加する保護者



非公式教育を受ける青少年



団 体 名：特定非営利活動法人 シャプラニール=市民による海外協力の会
 助成活動名：バングラデシュ・ダッカにおける家事使用人として働く
少女支援プロジェクト
 活 動 地 域：バングラデシュ人民共和国
 団 体 本 部：〒169-8611 東京都新宿区西早稲田 2-3-1 早稲田奉仕園内
 HP アドレス：<https://www.shaplaneer.org/>
 設 立：1972年9月

首都ダッカには家事使用人として働く少女が大勢いると言われています。
 彼女たちは、料理、掃除、洗濯、子どもの世話、買い物等に朝早くから夜遅くまで追
 われて、長時間働き、学校に通い教育を受ける機会を奪われています。そして、閉ざさ
 れた家庭内で働いていることから、雇用主から暴力を受けることもあり、過酷な状況の
 もとで、とても弱い立場にあります。

2015年12月には、当団体を初めとするNGOや人権団体等の働きかけによって、バン
 グラデシュにて14歳未満の少女を家事使用人として雇うことを認めない政策が打ち出
 される等、家事使用人という、見過ごされてきた存在に目が向けられ始めました。

当団体は、家事使用人として働く少女が減ることを目的にヘルプセンターをダッカ市
 内に3ヶ所開設しました。各ヘルプセンターでは、家事使用人として働く少女たちへ、
 小学校2年生修了レベルの読み書きや計算等の基礎教育を提供し、ヘルプセンターに通
 う98名の内、79%以上の少女が簡単な文章の読み書きと計算ができるようになり、英
 語のスキルも上達しました。

14歳以上の少女へは新たな職業に就くために、縫製や刺繍、アクセサリー製作等の職
 業訓練を実施しました。職業訓練の一環で少女たちが作ったテーブルクロスや人形等の
 作品は、各ヘルプセンターが年1回実施する運動会で販売しました。売上げの15,363
 タカは、作品の教材の購入費や各センターの運営費に充てられました。

また、自宅でも学習を続けられるように雇い主からミシンを購入してもらったり、近
 隣住民から縫製の仕立てを依頼されたり、少女たちのモチベーションも上がってきてい
 ます。



団 体 名：スリヤールワ スリランカ
助成活動名：津波被災者のための託児所修繕
活 動 地 域：スリランカ民主社会主義共和国
団 体 本 部：〒454-0954 愛知県名古屋市中川区江松 5-1804
HP アドレス：http://www016.upp.so-net.ne.jp/srilanka/
設 立：1996年4月1日

2004年12月に発生したスマトラ沖地震で、ハンバントタ地域は津波被害に見舞われました。

当団体は、津波被災者に救援物資を集めて贈るとともに、被災した親が働きやすいように子どもを預ける託児所を開設しました。

開設から10年以上が経過し、地域住民にも託児所の存在が広く知れ渡り、英語教育を取り入れたこともあって、現在では地域でナンバーワンの託児所と言われるようになりました。今年度は、度重なる洪水の影響によって、隣の土地との境界として設置したブロック積みの塀の地盤が緩んだため、新たに塀を設置しました。倒壊の恐れがなくなって、園児たちは心おきなく園庭で遊べるようになりました。

また、猿の集団によって壊され穴が空き、雨漏りする状態となった屋根の修復工事と、潮風等の影響で劣化した壁の腰部塗装も無事に完了しました。

その他にも、園児たちの健康を守るために、日本の歯磨きセットを園児全員へプレゼントし、当団体の代表と託児所の先生らによって、歯磨きの指導をしました。さらに、現地の医師により、園児一人一人に診察と指導をし、その結果をノートに記載して渡しました。

身長と体重の測定では、園児たちは初めての経験だったため、楽しんで実施することができました。

現地医師による診察と指導



初めての身長と体重の測定



団 体 名：特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

助成活動名：ガザ地区中部アル・マガジ&アル・ブレイジにおける、子どもの栄養失調
予防及び地域保健促進員の研修事業

活 動 地 域：パレスチナ暫定自治区（ガザ地区）

団 体 本 部：〒110-8605 東京都台東区上野 5-3-4 クリエイティブ One 秋葉原ビル 6F

HP アドレス：<http://www.ngo-jvc.net/>

設 立：1980年2月27日

ガザ地区は、2007年から陸・海・空をイスラエルに軍事封鎖され、外部との接点が限られた非常に厳しい状況にあります。さらに封鎖後4度に渡って行われた戦争は衣食住や医療・保健・教育等の社会サービスの不足を招き、人々を苦しめ続けています。最近では政治的背景から来る電気不足も深刻です。このような中、子どもたちの栄養状態はとてつもなく厳しく、慢性的な栄養不足から、平均よりも身長が低い状態の低身長、そして貧血等に苦しんでいます。当団体は、そういった状況を改善するため、2011年から現地団体と協力し、女性の教育を通じて子どもの栄養失調予防事業に取り組んでいます。

今年度は、地域のためにボランティアとして活動する意志のある30名の女性を対象に、栄養と子どもの成長に関する研修を4週間実施しました。研修を受けたボランティアたちは、現地の保健指導員の指導のもと、家庭訪問や講習によって現地の母親へ保健や栄養の指導を実施しました。また、地域の子どもたち1,500名へ発達に関するチェックを実施しました。そのうち、発達に遅れがあると診断された82名の子どもたちには専門機関を紹介しました。子どもにどう接していいかわからないと悩む多くの大人たちへ子どもとの正しい接し方も教えています。

また、地域のネットワーク作りの一環として、地域住民20名で構成された委員会を立ち上げ、メンバーは情報交換や地域内の調整を図っています。

この活動を通して、地域における栄養に関する知識が向上するとともに、地域に貢献することでボランティアたちの自尊心の向上にも役立ちました。

子どもの発達をチェックする様子



研修を受けるボランティアたち



団 体 名：認定特定非営利活動法人 日本ハビタット協会

助成活動名：ラオスのルアンパバン県の学校における養鶏による給食及び

生活環境改善事業

活 動 地 域：ラオス人民民主共和国

団 体 本 部：〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-6-3

都道府県会館 5 階福島県東京事務所分室内

HP アドレス：<https://www.habitat.or.jp/>

設 立：2001 年 3 月 16 日

ラオスの農村部の学校では、給水設備がない等学校の設備が不十分で、トイレの使用や水浴びができない等、子どもたちの生活環境は非常に厳しい状況にあります。ラオスでは近年、経済が少しずつ発展しているものの、政府は農村部の学校へ支援をする余裕がありません。そのため、子どもたちは水汲みのために、近くの川や自宅から水を持って来る等肉体的な負担を抱えていて、勉強に費やす時間にも影響があります。さらに、農村部の多くの学校では、徒歩で通うことが難しい子どもが学校の寮で暮らしています。子どもたちの多くは貧しい家庭のため、きちんと食事が取れていないことも大きな問題となっていました。

今年度は、農村部にある全校生徒約 900 名の中学校に給水設備を設置しました。安定的な給水が確保できたことによって、現地の政府により 17 基のトイレが建設され、特に寮で生活する約 300 名の生徒たちがトイレを使用することができ、川で行っていた水浴びが学校の敷地内で行えるようになりました。また、学校内に養鶏場を設置し、300 羽の鶏とアヒルを飼い始めました。その内 101 羽は子どもたちへ栄養のある食事を提供するために給食として利用しました。残りの分は販売し、162.50 ドルの現金収入を得ました。この収入を、学校運営費の補助や食料、学校設備の改善、文房具等の購入に充てることができるようになり、子どもたちの教育環境の改善に役立てることができました。

完成した給水設備



先生と生徒が育てている鶏の雛



団 体 名：認定特定非営利活動法人 リボーン・京都

助成活動名：ルワンダ共和国キガリ市でのフェアトレード事業と洋裁訓練

フォローアップ指導

活 動 地 域：ルワンダ共和国

団 体 本 部：〒604-8217 京都府京都市中京区六角新町西入西六角町 101 番地

HP アドレス：<http://www.reborn-kyoto.org/>

設 立：2002 年 9 月 5 日

1994 年の大量虐殺で多くの犠牲者を出したルワンダは、現在経済成長を続けていますが、国民の 4 割近くが貧困層に属しています。

当団体は、2013 年より首都キガリ市にある公立職業訓練センターに洋裁技術訓練コースを開設しました。主に女性の若年貧困層を対象に、工業用ミシンを投入して、寄附された日本の着物地を教材として使う、高品質で高度な洋裁訓練を 3 年間行いました。修了生のうち、現在 70%が洋裁関連の職に就くことができましたが、作品を先進国で販売するためには、技術的に不足しています。

今年度は、日本から洋裁の専門家を派遣して、さらに高度な縫製技術の訓練を修了生 18 名へ実施しました。先進国で販売できる作品を製作できるように、柄の選び方、機能性、細部にまでこだわって丁寧な物作りを学べるようサポートしました。訓練生は、着物地のトレンチコートやブラウス等流行のデザインを中心に製作しました。

また、ギデンゲというルワンダの伝統布を使って、ブルゾンやワンピースも製作しました。完成した作品は日本へ送られ、日本人の洋裁専門家が 1 点ずつ品質を確認しました。今年度は、11 名の生徒によって 80 着の作品を完成させることができ、それらの作品は主に日本でのバザーや、アメリカで開催されたフェスティバルで販売し、合計約 250 万円を売上げました。

ギデンゲ布を手にする訓練生たち



日本人専門家から指導を受ける訓練生

